

ユニット型特別養護老人ホームにおける 夜勤スタッフの介護様態に関する考察

石井研究室 由利 慶一
佐々木 得壮

キーワード...「ユニットケア」、「夜勤」、「拠点ユニット」、「平面構成」

1. 研究の背景と目的

ユニットケア型特別養護老人ホームにおけるスタッフの介護様態は研究も進み、その現状が解明されてきている。しかし、夜間の介護様態に着目すると、ほとんど解明されていないのが現状である。昼間と夜間では、ユニット単位でのケア体制から2ユニットを単位としての体制に変わる。夜間はスタッフの受け持ち体制が変わることから、昼間とは違う介護様態があると考えられる。また、そのことは、ユニットのつなげ方など、平面構成のあり方にも影響を及ぼすこととなる。そこで、本研究では夜勤スタッフの介護様態とそれに伴う空間利用を分析することで、夜間のユニットケアの実態と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 調査の方法

調査対象施設は、宮城県利府町のユニット型特別養護老人ホーム（以下、K特養）である。夜勤時は6つあるユニットを3人のスタッフで担当し、1人2ユニットを担当している 図 - 1。今回の調査では、この夜勤スタッフの空間利用とそれに伴う行為について詳細に記録・観察を実施した。調査では20:30～翌7:00までの11時間半、1分ごとに滞在場所と行為の

記録を夜勤スタッフ全員に対し行った。調査は06年10月3日と06年10月11日の2回行った。

3. 調査対象施設の概要

K特養は05年4月に開設した 図 - 1。6つのユニットの各定員は8～9名である。ユニット間は廊下で繋がっており、ユニット内部でも廊下で繋がっているという平面的特徴を持つ。各ユニットの要介護度はABユニットが3.7（A:3.5,B:3.9）、CDユニットが3.7（C:3.8,D:3.5）、EFユニットが3.2（E:3.1,F:3.3）である。

4. 夜勤スタッフの介護行為についての考察

4-1 ユニット別にみた考察

全体での平均をみると、記録業務等の「直接事務」が30%、次いで基本的な身体介助となる「基本介護」が18%と全体の約5割を占めている 図 - 2全体。

ユニット別に見てみると介護行為の内容が多少ではあるが異なる。CD、EFユニットはほぼ同様の結果となったが、ABユニットは「基本介護」の割合が32%と高い。これは入居者にターミナル状態にある要観察者がいたためである。このように夜間の介護は、入居者の状態により大きく変化をすることがわかる。

4-2 時間帯別にみた考察

時間帯を3区分し、それぞれでの介護行為の割合を分析した 図 - 2時間帯別。

時間帯別で比較していくと、夜間帯は「基本介護」が



図-1 ユニット構成図と入居者の要介護度

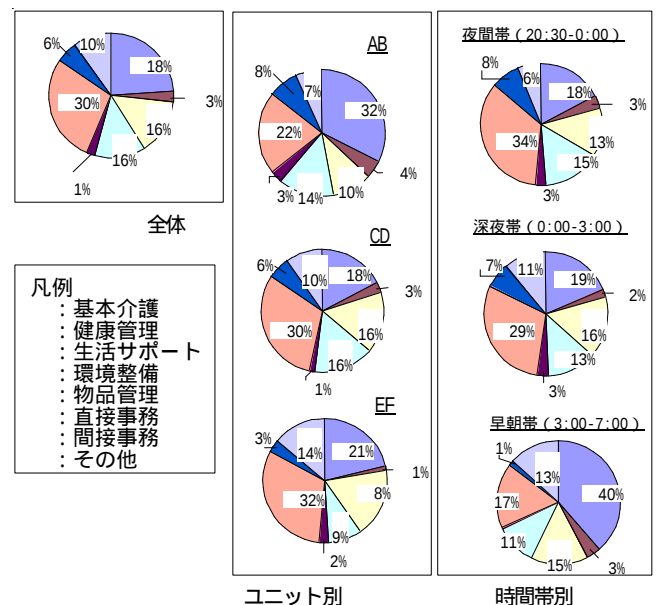


図-2 夜勤スタッフの介護行為の割合

18%、「直接事務」が34%となり、深夜帯は「基本介護」が19%、「直接事務」が29%となった。それに対し早朝帯は「基本介護」が40%、「直接事務」が17%となっている。これは、早朝に入居者の着替え補助や排泄介助、居室のなど行っていたためである。このように、時間帯により介護行為の内容が異なることが分かる。

5. 夜勤スタッフの空間利用についての考察

5-1 ユニット別にみた滞在の割合

スタッフのユニット内外の滞在の割合はユニット内が9割以上占めていた 表-1。また、2つのユニットを担当するスタッフはどちらか1つのユニットのリビングを拠点にし、夜勤の勤務をしている実態が明らかになった。入居者のその日の状態によっても変わるが、滞在様態に大きな偏りが見られた 表-1。

5-2 空間利用についての考察

ユニット内での空間利用は居室とリビングで約8割を占める。居室では見回りによる介護・介助が、リビングでは記録や書類作成、備品の管理（洗濯物たたみ、汚物処理に使う新聞折りなど）が主な行為である。

また、ナースコールでの対応は全ユニットで調査1回目が13回、調査2回目が11回だった。ユニット平均2回/日となり、多くがトイレ介助であった。

表-1 スタッフのユニット別滞在割合

ユニット	A	B	C	D	E	F	その他
A-B(1回目)	65%	32%					3%
C-D(1回目)			8%	91%			1%
E-F(1回目)					24%	76%	0%
A-B(2回目)	62%	35%					3%
C-D(2回目)			20%	77%			3%
E-F(2回目)					71%	29%	0%

表-2 ユニット内での空間利用の割合

調査日	ユニット名	居室	リビング	キッチン	その他
調査1回目 (10月3日)	ABユニット(スタッフ:Oさん)	44%	35%	13%	9%
	CDユニット(スタッフ:Kさん)	20%	58%	11%	12%
	EFユニット(スタッフ:Mさん)	34%	45%	16%	5%
	平均	33%	46%	13%	9%
	ABユニット(スタッフ:Yさん)	41%	36%	17%	6%
調査2回目 (10月11日)	CDユニット(スタッフ:Sさん)	37%	46%	5%	12%
	EFユニット(スタッフ:Wさん)	37%	44%	18%	2%
	平均	38%	42%	13%	7%

6. 時間帯別に見た介護行為と空間利用の様態

スタッフの介護行為とユニット間の移動の状況を時系列で見たものが 図-3 である。黒い部分は主に入居者に対する「基本介護」(排泄介助等)を表し、グレー部分は主に記録等の「事務行為」を表す。これより、夜間は受け持つ2ユニットのうち、一方のユニットに活動する拠点を置き、動いている実態がよく分かる。これらを踏まえて、違いが顕著に見られた2つの介護単位ABとCDを事例にとり考察する。

(1)【事例-1】ABユニット 図-3上

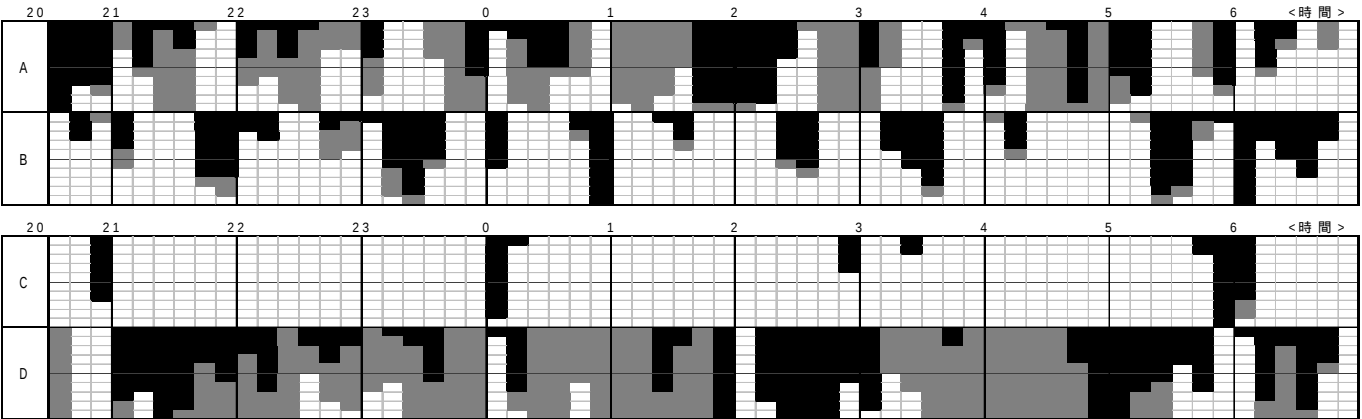
「基本介護」の行為が目立つ。Aユニットには要観察者がいたため、基本介護にかかる時間が多くなっていた。パソコンによる記録はAユニットにおいて行われており、基本介護の合間に多く見られた。この介護単位の場合、Aユニット(滞在率65%)に拠点を置いて活動していた 表-1。

(2)【事例-2】CDユニット 図-3下

「直接事務」にあたる記録行為が目立つ。寝つきが悪く、徘徊をしていた利用者をDユニット内で相手し、対応する場面も頻繁に見られた。この入居者を除いては、両ユニットの入居者とも様態が落ち着いていたため、Cユニットでの滞在は定時の見回りの時のみであった。この介護単位の場合、Dユニット(滞在率91%)がでの滞在が主となっていた 表-1。

7. まとめ

夜間の介護行為と空間利用の実態が明らかになった。その中では入居者の状態や時間帯によりその様態が異なることがわかった。2つのユニットを担当するスタッフは一方のユニットを拠点にしているため、滞在様態に大きく偏りがみられる。また、要観察者の有無によってもスタッフの動きには大きな違いがみられ、その分スタッフへの負担も大きくなる。K特養では各ユニットが内部でも繋がる平面構成をとっていたことで、スタッフは動きを最小限にすることが可能となっていた。このように夜勤の体制を考えた場合、ユニット構成など平面計画は重要となる。



凡例: ■は主に基本介護を表し、■は主に事務行為を表す。1マス1分刻みで行為量を示している

<図-3>ユニット別-時間帯別に見た介護様態